

## マタイ2章1-11節 「遠くからの礼拝」

### 1A インマヌエル(臨在)

### 2A 罪から救われる方(贖罪)

### 3A ユダヤ人の王(選ばれた方)

#### 1B 東方(呪われた地)

#### 2B 賢者(信じる者)

#### 3B 恐れるヘロデ

#### 4B 導く星(希望の栄光)

#### 5B 礼拝(力と富の移譲)

## 本文

今朝の聖書本文は、マタイ2章1-11節です。

「<sup>1</sup> イエスがヘロデ王の時代に、ユダヤのベツレヘムでお生まれになったとき、見よ、東の方から博士たちがエルサレムにやって来て、こう言った。<sup>2</sup>「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。私たちはその方の星が昇るのを見たので、礼拝するために来ました。」<sup>3</sup>これを聞いてヘロデ王は動揺した。エルサレム中の人々も王と同じであった。

<sup>4</sup> 王は民の祭司長たち、律法学者たちをみな集め、キリストはどこで生まれるのかと問いただした。<sup>5</sup> 彼らは王に言った。「ユダヤのベツレヘムです。預言者によってこう書かれています。<sup>6</sup>『ユダの地、ベツレヘムよ、あなたはユダを治める者たちの中で、決して一番小さくはない。あなたから治める者が出て、わたしの民イスラエルを牧するからである。』」<sup>7</sup> そこでヘロデは博士たちをひそかに呼んで、彼らから、星が現れた時期について詳しく聞いた。<sup>8</sup> そして、「行って幼子について詳しく調べ、見つけたら知らせてもらいたい。私も行って拝むから」と言って、彼らをベツレヘムに送り出した。

<sup>9</sup> 博士たちは、王の言ったことを聞いて出て行った。すると見よ。かつて昇るのを見たあの星が、彼らの先に立って進み、ついに幼子のいるところまで来て、その上にとどまった。<sup>10</sup> その星を見て、彼らはこの上もなく喜んだ。<sup>11</sup> それから家に入り、母マリアとともにいる幼子を見、ひれ伏して礼拝した。そして宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた。」

私たちは、イエス様がお生まれになって羊飼いがイエス様を拝みに来たところを交読文で読みました。そして今、読んだところは、イエス様が生まれてから二年近く経った時のことです。クリスマスの意味は、「キリストのミサ」すなわち、「キリストを礼拝する」ことであります。キリストがお生ま

れになった時にこの方を礼拝した人々はこの方が来られると切に待ち望んでいた人々でありました。つまり、心備えができていない人でなければ、真の意味でクリスマスを経験できません。ですから、私たちも主のご降誕の意味について思い巡らしてみたいと思います。

今、私たちが読みました「**東方の博士**」のエルサレム訪問ですが、驚くべき出来事です。なぜなら、彼らはイスラエル人ではないのに、ユダヤ人の王を拝みにやってきたと言っています。そして、はるか遠くから幼いイエス様に会いに来ました。東方というのは、今のイラク辺りではないかと思えます。1000 ㎞、2000 ㎞ぐらい離れているでしょうか。そして、肝心のエルサレムの人々は、恐れを抱いていても、関心が薄かった様子が伺えます。

「近いとかえって感謝せず、遠いから感謝する」というのは人間の性かもしれません。私の家からは毎日、スカイツリーが見えています。けれども、一度も行ったことがありません。けれども、スカイツリーにはるばる九州や沖縄から、いや外国からやってくる人たちもいますね。遠い人がとても大事にし、近い人が近いがゆえにないがしろにします。イエス様についても、そうかもしれません。身近な存在、近くで数多く見聞きする存在だからないがしろにするけれども、一度聞いた人、僅かに聞いた人のほうが感謝することがあるかもしれません。遠くからの参拝者たちについて、見ていきます。

### 1A インマヌエル(臨在)

クリスマスの何が特別なものになっているのでしょうか？単に、「イエスが生まれた日」とだけ言っても、実は正しくありません。それは、「天地を創造された神が、人の肉体をもって現れた。」ということでもあります。神が人のど真ん中に介入された人の姿を取って来られた、ということです。「初めにことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。…ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。(ヨハネ 1:1,14)」

マタイ 1 章 22-23 節を見てください、先ほど読んだ 2 章の手前です。「このすべての出来事は、主が預言者を通して言われた事が成就するためであった。」「<sup>22</sup> このすべての出来事は、主が預言者を通して語られたことが成就するためであった。<sup>23</sup>「見よ、処女が身ごもっている。そして男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」それは、訳すと「神が私たちとともにおられる」という意味である。」インマヌエル、神が私たちと共におられるということです。これは比喩的な意味ではなく、文字通り、処女から生まれた赤子のイエス様が、天地創造、万物を創造された神ご自身であったという意味です。神であり、かつ人であった方です。

私たちは、自分の思いの中で神はどのような存在かを思い描いています。ひげをはやしたおじいさんなのかな？とか、または、天と地を支配しているけれども、地震や津波で人を死なせるような酷い方であるとか、一生懸命呼び求めても一向に答えをくださらない方であるとか、いろいろ想

像しています。

けれども、はっきりしたことが言えないので曖昧なままになっています。そこで、人は目に見えるように神を形造ります。それが偶像、木や石や、金銀で造られている像です。目に見えない存在よりも、目に見える頼れる存在が欲しいのです。けれども、その像が何か話すわけではないし、自分の祈りを聞いてくれるわけでもありません。そして、木や石の偶像ではなくても、ある憧れる人であるとか、自分の能力を鍛えてそれを信じるとか、何か目に見えるものに拠りすがろうとしています。

けれども、本当に拠り頼むことのできる存在は、造られたものではなく、造った方です。世界を造り、この自分を造られた方に拠り頼むことこそが、私たちを満足させます。自然を見れば、神のすばらしさが分かります。天体の星の動き、そして自然界の不思議、また人体もそうです、どんなに科学や先端技術が発達したと言っても、そのような秩序と精密な構造を決して作り出すことはできません。自然界が神のおられることをはっきりと証明しています。

けれども、それだけでは足りません。自然には、人格、パーソナリティーが見えません。けれども神は考えるし、神は計画するし、そして神は言葉を話すし、神は悲しまれるし、喜ばれるし、何よりもご自分の造られたものを愛し、慕っておられます。そこで神は、二千年前にご自分の本質を御子の中に完全に現してくださいました。福音書に書かれているイエス様を見てください。そこに、神が誰であるかが、はっきりと現れているのです。

そして受肉の二つ目の目的は、「人と一体になる」ということです。天におられて、全知全能であり、この宇宙よりも大きい無限大の方が、どのように今、風邪やその他の病気で悩んでいる人に同情できるのでしょうか？会社の激務で頭がストレスでいっぱいになっている人の気持ちが分かるのでしょうか？そこで神は肉体を取られました。私たちの肉体にある弱さをすべて知っておられます。そのことによって、神は人と一つになることができました。

私たちが蟻に何か良くしてあげたいと思っても、蟻にはそのことは伝わりません。蟻に自分が気にかけていることを伝えるには蟻になるのが最も効果的です。神は同じことをしてくださいました。神が人となることによって、人と一体になることにより、人をご自分に導くことができます。私たち人間は、人となられたキリストによって父なる神に導かれることができます。

## **2A 罪から救われる方(贖罪)**

そして、神が人となられた目的の三つ目は、「罪から救うこと」です。マタイ1章をまた見てください。21 節です、「<sup>21</sup> マリアは男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい。この方がご自分の民をその罪からお救いになるのです。」イエスのヘブル語はヨシュアです。ヨシュアは、イェホシュアの短縮形で、「ヤハウエは救い」つまり「主は救い」という意味です。

イエス様は私たちの重荷を負ってくださいました。ご自身が肉体を取られることによって、私たちの人生の中で受ける苦しみをすべて負ってくださいました。人の負っている重荷で最大のものは、人の罪です。天地を創造した神から目を逸らして、自分自身で生きてきた背きの罪です。そして、神のおきてに背いてきた罪です。この罪の縄目に捕えられている私たち人間を解放するために、ご自身が血と肉を持ち、その肉体において神からの処罰を受けられました。かつて、ユダヤ人は牛や羊を罪のためのいけにえにしていますが、神はご自分の子に肉体を持つようにさせ、その体をいけにえとして献げるようにされたのです。

イエス様は、「マタ 11:28 すべて疲れた人、重荷を負っている人はわたしのもとに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」と言われました。イエス様のところに来てください。そして人生のすべての重荷、ことに自分の罪をキリストが負ってくださったことを認めて、この方のところに来てください。イエス様は魂の休息を与えることができます。

### 3A ユダヤ人の王(選ばれた方)

冒頭で読んだ本文に戻ります。

#### 1B 東方(呪われた地)

<sup>1</sup> イエスがヘロデ王の時代に、ユダヤのベツレヘムでお生まれになったとき、見よ、東の方から博士たちがエルサレムにやって来て、こう言った。<sup>2</sup>「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。私たちはその方の星が昇るのを見たので、礼拝するために来ました。」<sup>3</sup>これを聞いてヘロデ王は動揺した。エルサレム中の人々も王と同じであった。

ルカによる福音書では、ローマ皇帝が住民登録をせよとの命令を出したので、全住民が自分の生まれ故郷に戻らなければいけませんでしたが。そのためにヨセフの故郷ベツレヘムに行きました。ローマには皇帝がいますが、ローマによって任命を受けたヘロデという人物がいます。彼はユダヤ人ではなくイドマヤという、エドム人でした。けれども、この地域をユダヤ人の王として支配していました。

#### 2B 賢者(信じる者)

そこに東方からの博士たちが来たのです。博士というよりも「賢者」と訳したほうが良いです。占星術もするような人たちで、東方の国では、そのような者が王の側近として働いていました。今で言うならば、政府の首相に助言を与える顧問というところでしょう。そのような地位の高い人たちですから、エルサレムに来た時には政府代表団のような威厳と力をもってやって来ました。そして、ユダヤ人の王であるヘロデに向かって、「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。」と尋ねたのです。どおりで、ヘロデもエルサレムにいる者たちも恐れたわけです。

この東方には、かつてバビロンという国が台頭しました。そして、バビロンがユダヤ人の国を滅ぼして、彼らを捕虜にした時に、そのような暗黒時代に、一つの光が灯されていました。ダニエルという神に愛されたユダヤ人です。彼はバビロンの王に仕えて、また彼は夢を解き明かす力を神から与えられていました。占星術をしても決して解き明かせなかったバビロンの王の夢を彼は解き明かしました。彼は王の信頼を得て、ついにはそのような賢者たちの長になりました。そして、キリストが来られることの預言も行いました。そのような、ユダヤ人にとって暗き時代にあっても、むしろその中にいる人々に光を示すことができた証人がいたのです。そして、もしかしたらそうした知識が語り継がれてきて、占星術をしながらかなおかつ、メシアが到来するというしるしを見つけたのかもかもしれません。

私たちの社会も暗き物事が多いですが、それでも光があるのです。その光を捜すようにして、エルサレムにやってきた賢者たちのように、ご自身が捜せば、必ずイエス様が見出してくださいます。

### 3B 恐れるヘロデ

東方の博士たちが、喜びと期待の思いをもってエルサレムに来たのに対して、ヘロデとエルサレムの住民は全く反対の反応をしました。ユダヤ人たちはヘロデを嫌っていましたが、それでも、やはりヘロデによって自分たちの社会が安定していました。ヘロデは、偏執狂で有名でしたから、こんな時にヘロデを怒らせたら、我々に何をしでかすか分からないという恐れがあったでしょう。不満があっても、人は安定を好みます。まことの救い、解放が来る時に、私たちはそれが自分にとって益になるのを知っているのに、古いもの、古い秩序や習慣にしがみつこうとしてしまいます。けれども、勇気を出して新しく示された道に踏み出してみてください。

<sup>4</sup> 王は民の祭司長たち、律法学者たちをみな集め、キリストはどこで生まれるのかと問いただした。  
<sup>5</sup> 彼らは王に言った。「ユダヤのベツレヘムです。預言者によってこう書かれています。<sup>6</sup>『ユダの地、ベツレヘムよ、あなたはユダを治める者たちの中で 決して一番小さくはない。あなたから治める者が出て、わたしの民イスラエルを牧するからである。』<sup>7</sup> そこでヘロデは博士たちをひそかに呼んで、彼らから、星が現れた時期について詳しく聞いた。<sup>8</sup> そして、「行って幼子について詳しく調べ、見つけたら知らせてもらいたい。私も行って拝むから」と言って、彼らをベツレヘムに送り出した。

東方からの賢者たちは、ユダヤ人の王を礼拝するためエルサレムに来たのですが、ユダヤ人の王は、メシア、キリストであることは、自身ユダヤ教徒であるヘロデ本人が良く知っていました。そして、聖書によればどこから出て来るのか分かるはずだと思い、それをユダヤ人たちの学者たちに聞いたのです。彼らの答えは、「ベツレヘム」でした。彼らは、ミカ書 5 章 2 節を読みました。ミカの預言では、ユダの民がバビロンの捕囚の民として連れて行かれることを話した後で、それでもベツレヘムからイスラエルの支配者になる者が出てくるという預言でありました。しかも、それが、

神が永遠の昔から定めておられると決めておられるところです。

ヘロデは反応しているのですが、祭司長や学者たちは自分たちのメシアが来られたのだから、拝みに行こうというようにはなっていないことは不思議です。僅かな光、僅かな知識しか与えられていない東方の賢者たちが、はるばる礼拝しに来たのに、肝心の神の言葉に精通している者たちが、預言の言葉の成就に感動していないのです。マラキという預言者が、神の神殿に仕える祭司たちの問題を取り上げています。神に仕えながら、マンネリ化して、神の愛が分からなくなり、心が神から離れていて、その奉仕が中途半端になっていたということです。これは、神に仕えるすべてのキリスト者、信仰者の課題です。

#### 4B 導く星(希望の栄光)

<sup>9</sup>博士たちは、王の言ったことを聞いて出て行った。すると見よ。かつて昇るのを見たあの星が、彼らの先に立って進み、ついに幼子のいるところまで来て、その上にとどまった。<sup>10</sup>その星を見て、彼らはこの上もなく喜んだ。

ヘロデのどろどろした陰謀から、一気に喜びの雰囲気が変わります。彼らは、ユダヤ人の王が来て来るというところまでは聞いていたのですが、そこからが分かりませんでした。ところが、その時に、「かつて昇るのを見たあの星が、彼らの先に立って進み」とあります。なんとすばらしいことでしょうか！今、彼らが信仰によって、長い旅に踏み出したその希望の光が、再び自分たちの目の前に現れました。ところで、この星はおそらく、単なる物理的な星のことではなく、光り輝く神の栄光であったでしょう。

先に、彼らがダニエルの時代に、ユダヤ人の王が来るという伝説が残っていたのではないかと、いう話をしました。さらにさかのぼって、昔、同じく東方から来た預言者バラムが、次の預言を行いました。「民 24:17 私には彼が見える。しかし今のことではない。私は彼を見つめる。しかし近くのことではない。ヤコブから一つの星が進み出る。」イスラエルから一つの星が進み出ると預言していたのです。このバラムの預言と、ダニエルの預言が東方で記録として残っていて、それでこの賢者らがユダヤ人の王のしるしとしての星を調べて、捜し出したのでしょう。それが、今、自分たちの目の前で光っているのです。しかも、幼子のおられるところまで来て、そこで留まっているのです！

クリスマス話の二つが、羊飼いの時と、東方の賢者たちが、どちらも夜において、光が照らされているということに共通しています。それは、世界は暗闇の中にあることを暗示しています。人の罪による圧力がかけられている中に住んでいます。けれども、だからこそクリスマスがあります。その暗闇に光が来たのです。ご自身の中に闇がありますか？自分の負っている負い目、人には話していないこと…。そういったもののど真ん中に、キリストが光として来てくださいます。

## 5B 礼拝(力と富の移譲)

<sup>11</sup> それから家に入り、母マリアとともにいる幼子を見、ひれ伏して礼拝した。そして宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた。

幼子イエスを礼拝し、贈り物を渡します。当時は贈り物を渡す行為は、相手を王として仰いでいること、その王に服して、仕えることを意味していました。東方からの賢者が、その大きな権力と富があるにも関わらず、その幼子にひれ伏したのです。イザヤ書には、再臨のキリストに諸国が贈り物を持ってくる預言があります(60:11)。けれども、力と栄光に富む再臨のキリストではなく、幼子キリストに同じ礼拝の姿勢を見せました。

そして、その献げ物であります、「黄金」は、王の輝かしい栄光が示されています。「乳香」は、「乳香樹という木の樹脂が固まったもの」です。「乳汁と果汁をかき混ぜたような不思議な半透明の色をしています。…加熱してみると、芳香を含んだ白煙が、ふつつつという微かな音とともにたちのぼります。」と日本人で、実際に経験した人が言っています。神への祈りにささげられる香りを表しているのでしょう。そして没薬も、ミルラと呼ばれる樹脂から取られたものです。死体の防腐剤として使われますが、なぜユダヤ人の王に対してそのような物がささげられたのでしょうか。ここに、キリストが罪のために死なれることが預言されています。この方こそ、全人類の罪の供え物となってくださった救い主であり、この方を信頼することによって罪の赦しを得ることが出来ます。本人たちは意識していなかった可能性のほうが大きいと思いますが、信仰によって捧げる時に、このように神の御霊によって、ぴったりと合ったものを捧げることができます。

私たちはどうでしょうか？キリストは、私たちに信じることを強制しません。それはあたかも、小さな幼子が大人の私たちに何も強制できないのと同じです。しかし、その人になられた、弱く、小さくなられた方に自分の生活の全てを捧げるという礼拝をするのです。皆さんは、どのような声を神から聞いているのでしょうか？その声は小さく、優しいものです。無理やり強いるような声は、神からのものではありません。むしろ、自分の痛みや弱さ、何よりも罪に対して、愛をもってそれをご自身の体に受けたのだという声为本物です。この方にひれ伏してください。幼子にさえもひれ伏すような自発的な礼拝こそが、真実な礼拝です。